

揺れる季節

林

礼子

MBC
21



林 礼子

昭和45年埼玉県に生まれる。
埼玉県坂戸市立住吉中学を
経て、県立坂戸高等学校普
通科に在席中。

現在は足にしびれをきら
しながらも、茶道部で頑張
っている。

揺れる季節

著者 林 礼 子

発行者 渡 邊 幸 子

発行所 マイブックチエーン 21

東京都千代田区富士見二六+

電 話 〇三(三三)七一七〇

発売所 株式会社東京経済

印刷所 ㈱三信印刷工業

初 版 昭和61年7月1日

第三刷 昭和61年7月21日 定価680円

落丁・乱丁はお取替えいたします。

揺れる季節

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

「誰々の夢の中でみる白い紙に、大きく書かれた文字が、

誰々を真新しい夢の中へと誘い込む」

三砂とも子（橋／位相より）

揺れる季節 目次

プロローグ	7
危険	12
親友	37
いじめ	70
悪夢	91

裏切り……………	107
不良少女……………	118
出会い……………	134
全国中学生弁論大会……………	154
あれから一年……………	178
あとがきにかえて（手紙）……………	185

ブローグ

「信頼なんてありやしない。一人一人が自分勝手に生活してるのが、人間社会つてもでしょ。ねえ、先生」

理恵は激しい口調できっぱりと言った。

顔は、次から次へと流れてくる涙で、ぐしょぐしょに濡^ぬれている。しかし、そんなことはどうでもよかった。というよりも彼女自身、やり場のない気持ちをどうすれば良いのか、わからなかったのだ。

「佐々木、おまえは何が言いたいのだ!! 中学生の分際で、生意気なことを言うんじゃない」

「なんですって!! じゃあ先生、私の言ってることは生意気なんですか? 中学生が生意気を言っちゃいけないんですか?」

「きまつてるだろう。おまえらに必要なのは教師の言うことをしっかり守ってだな、名門校に入ることなんだよ」

「ひどい!! それじゃ私達はものと同じじゃないですか」

「そんなところだろう。おまえら個人で一体何ができるというんだ。まあ、教師にそんな風に反抗するようじゃ、高校も危ないだろうがあ。何しろ、内申をつけるのはこっちなんだからな。おまえは頭がいいんだ。それくらいわかるだろう。おとなしくしてりゃ、やっていけるんだよ。人間社会ってものはな」

理恵はたまらなかった。こんな言葉が、四十歳をこえたベテラン教師の口から出たとは思えなかった。

あたりがざわめいた。いち早く事件を聞きつけた生徒達が二人を取り囲んでいた。まだ、授業の最中である。

理恵は堪えられなかった。広岡教諭の言葉も、やじを飛ばす周囲も堪えられなかった。何もかもが嫌だった。理恵は、まわりのやじにはかかわらず、棒立ちになっていた。

やじの中には、教諭を「なぐってしまえ」という過激なものも混っていた。しかし、彼らは今、少なくとも理恵の味方でないことは確かだった。放っておいてもらいたかった。これは、私自身の問題なのだから……。

教諭は嫌な笑いを顔に浮かべ、教室中を見渡して言った。

「ほらほら、まだ授業中だぞ。早く席に着きなさい。それとも、高校に入れなくてもいいのかな？ 先生は、おまえらの成績をどうにだって変えられるんだぞ。うん」

まるで脅迫である。理恵は胸の奥底から、怒りが込み上げてくるのを知った。

こんな話、おかしんじゃない？ 人を教育する人間がこれじゃあ、生徒も悪くなる筈だわ。ねえみんな、そんな人のいいなりになっていいの？ 私達はまだ中学二年生なのよ。やりたいこと、いっぱいあるでしょ。高校受験って、そんなに素晴らしいものなの？ それにパスすれば、立派な人間として認められるの？ そんなのっておかしいじゃない。頭が良くなるのはとても良いことだと思うわ。だけど、どの教師も、詰め込み式の授業しかしていないじゃない。そんな人達に、ペーパーテストで自分の価値を決められて、あなた達は堪えられるの？ やっぱ堪えるしかないの？ 高校

受験のために……。

理恵はクラスメートにそう言いたかった。けれどもそれは、言葉になって出てこなかった。いつの間にか、手は汗でびっしょりになっていた。教室で立っているのは理恵だけだった。

「おい。おまえも早く席に着け!! 授業の邪魔になるからな」

「……………」

「まあ、これにこりて、しばらくおとなしくしていれば、高校なんて楽に入れるんだぞ」

「そういう言い方って、ないじゃないですか」

教室中がざわめいた。みんなの目が、理恵に集中する。誰の目にも、広岡教諭に対する批判の気持ちがいめられていた。クラスメート一人一人が、何かを訴えているように、真剣なまなざしであった。

「おまえはまだ私に反抗する気か? 何度言ったらわかるんだ」

「何がわかるんですか。あんたみたいな人に!!」

「ああ、わかったわかった。私はもう何も言わん。だから早く席に着け」

理恵はつかつかと、教卓に近づいていった。

「先生!!」

「何だ、まだ何か用……」

広岡教諭が後ろを向くと同時に、理恵の手は広岡教諭の頬ほおを、おもいつき叩いていた。そして振り返り、教室中を見渡した。みんなの顔が一瞬輝いた。しかし、それはほんの一瞬であった。みんな、自分自身を押し殺しているのだ。

「貴様……。教師を何だと思っているんだ。この不良少女が!!」

「不良少女でけっこうです。不良少女は不良少女らしく、エスケイプでもするのでしょうか。こんなヘタクソな授業、受ける気はしませんからねえ。全く、こんな授業でよく給料がもらえますねえ。まるで税金泥棒だわ」

理恵は広岡教諭を睨みつけながらそう言い放つと、みんなにうやうやしく一礼をし、教室を出て行った。さっきまでの少女らしいあどけなさが、まるで嘘うそのような顔つきになっていた。人はこれ程までに変わるものであろうか。広岡教諭は、そんな

理恵をあつけにとられたように見送ったが、すぐに氣をとりなおして言った。

「全く、何て奴だ。昨日まではいい子だと思っていたら、今日はこれだ。いいか、おまえらも、あんな奴とは付きあうなよ。自分がバカを見るぞ」

危険

佐々木理恵、それが少女の名前である。少女は駅の改札近くの椅子にすわっていた。日も暮れかかっている。晩秋の風は、少女には寒すぎる程冷たかった。また、理恵の前を通り過ぎる人々の目も冷たかった。その目には、好奇が溢^{あふ}れていた。目だけが異様なまでに光り、不気味だった。

「世間なんて、こんなものね……」

理恵はふと、そんなことを呟^{つぶや}きながら、手で抱えている膝に顔をうずめた。人の顔なんか、もう見たくなかった。声も聞きたくなかった。自分の殻の中に閉じこもって

いたいというのが本音だった。なぜだかは、理恵自身にもわからない。ぐらついた心とでもいうのだろうか、そんなものだ。

「ねえ、君」

誰かが、ポンポンと肩を叩く。理恵は何の反応も示さなかった。ただジーンツと顔をうずめているだけである。暗黒の世界に声は必要ない。感触も必要ない。理恵はそんなことを考えていた。しかし、

「ねえねえ、顔をあげてごらんよ。こんな所に何時間もすわっていたら、風邪かぜひいちゃうよ。風邪ひいたら自分が損をするだけだよ、ねえってば！」

あまりのしつこさに理恵はカチンときた。うらめしそうな目をしながら顔をあげ、言ってやった。

「うるさいなあ。そんなに何時間もすわってやしないよ。まだ四十六分しかここにいないんだよ」

が、言ってから驚いた。何と駅員ではないか。大学を出たばかりの若そうな人である。それにしても変な喋り方だ。男らしくないというか、なよなよしいというか、気

取ったところがなく、見てすぐに善人とわかるような顔だった。フワフワした髪の毛が印象的である。

駅員は理恵の顔を見ながら、首をかしげてニコツと笑った。その笑顔があまりに素敵なので、理恵も危うく笑い返してしまうところだった。唇の筋肉がフツとゆるみ微笑みそうになった時、おっとこれはいけないと思い直し、やっとのことで自制したのだ。

理恵が変な顔をしているので駅員は心配して、

「どうしたの？　どこか痛いのか？」

と聞いた。

顔のとおりに優しいんだなあ、と理恵は思った。そう思うと、何だか素直な気持ちになっていくような気がした。暗黒の世界にスーッと光が射したのである。

「あんた、変な人だねえ。いま時珍しいよ、あんたみたいな人」

駅員はキョトンとして目を見開いた。予想もつかぬ言葉を発せられたので、少々驚いたのだろう。

